

中央病院 「医・食・住・環境」市民シンポジウム開催 地域の「架け橋」に

京都民医連中央病院

事務次長

南

徹



3月30日、日本の将来を決める運動の「架け橋」の役割を強めようと中央病院が花園大学で「医・食・住・環境」「災害医療とまちづくり」シンポジウムを開催し、500名の市民が参加。吉中院

長が「いのちの大切さを共通認識にし、医・食・住・環境の視点から大いに討論し合いたい」と主催者あいさつ。東日本大震災「負けねえぞ被災地」福島・宮城・岩手三県人会合同プロジェクト実行委員会が訴えを行いました。

鳥越俊太郎氏が記念講演、「最大の被害を出すのは戦争であり、戦争は絶対にしてはならない。その点からも憲法九条を守りたい」と述べ、がんとの闘病体験と震災とを重ね合わせ、「突然降りかかった苦難をどう生きるかが問われている。震災を喪失だけの歴史にし

ないためにも、人との絆や社会を強いものにしていく」と訴えました。

シンポジウムでは、古武博司氏（西陣の町家古武主宰）がまちづくりを。地域医療から、災害時のネットワーキングを尾崎信之氏（中京西部医師会会長）が。

長澤澄子氏（長澤農園）がアレルギー食についての実践を報告。吉永純氏（花園大学社会福祉学部教授）が生活保護の切り下げを批判、社会保障の充実こそ必要と訴えました。4人のシンポジストがそれぞれの取組みを報告し、内容豊かなシンポジウムになりました。



4月2日、近畿高等看護専門学校で京都保健会基礎I課（新入職員）研修を開催しました。三浦理事長が歓迎あいさつ、①安全で安心な医療・介護を提供する、②地域の人たちに貢献し、地域住民の生活の場を知ってほしい、③社会の仕組みを変える大きな視野を持つことの3点を話され、「公益社団法人としての使命を自覚し、共に医療・介護を進めていきましょう」とエールを送られました。

講義は、「京都保健会の概要説明」、「就業規則と個人情報情報の取扱い」など、京都保健会の役割、社会人としての基本、そして医療人としての「感染対策」について、実技も交えながら学びました。

午後からは「ころに元氣・しごとに満足」と題し、コミュニケーション技法やセルフケアの対応などグループ討論で深め、交流することが出来ました。

京都保健会 新入職員研修 69名の新しい仲間を迎える